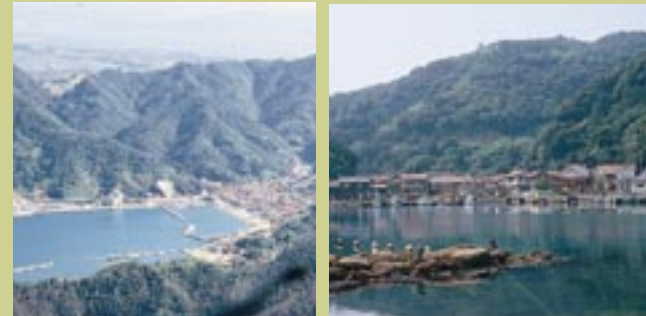


四つの「浦」の謎

大海では、浜が三四カ所、浦が四カ所、島が七カ所、御崎が一カ所紹介されています。浦として記載された四カ所とは、「久毛等浦」「美保関町雲津湾」「質留比浦（美保関町七類湾）」「手結浦（鹿島町手結浦）」「宇禮保浦（大社町宇禮湾）」ですが、これらに限り、「浜」ではなく「浦」としたのはなぜでしょう。

泊まらなかったことになってしまいがちです。また、「浜」には漁業に関する記載が数多く見られ、当然そこには多くの漁船が存在していたはずで、それなのに、「浜」には船の記載が見当たらない。何かが区別しなければならぬ理由でもあったのでしょうか？

この謎を解くカギは、「船」にありそうです。大海では「浦」に限って、船の記述が出てきます。では「浦」とは港で、「船」とは漁船のことなのでしょう。しかしそれは、当時出雲国に港は四カ所しかなく、漁船は、出雲国風土記に記載されている六二艘分しか



質留比浦 久毛等浦 手結浦 宇禮保浦

利用するのに十分な条件なのです。当時の日本は、新羅との関係の緊張など、日本海を防衛するため水軍の整備は急務でした。各国が軍事状況をまとめて朝廷に報告することは、当然のなりゆきと言えるでしょう。『出雲国風土記』には、「軍団」「烽火」など、政治的・軍事的な記載がたくさんあります。『出雲国風土記』のもう一つの性格が浮かび上がる、非常に興味深い説だと思つたのですが、みなさんはどう思われますか？



大海の産物

自然に満ちた島根半島沿岸では、対馬暖流の影響もあり、豊かで多くの海の幸と出会つていくことができます。それは今も昔も変わることはありません。どのような海産物が採れたのか、『出雲国風土記』の記載から見てみましょう。

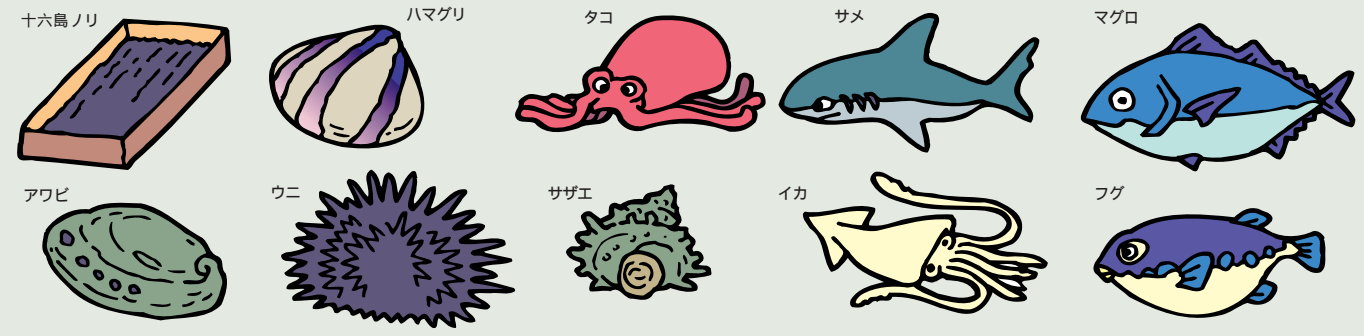
魚類の中では、シビ（マヅロ）の漁業が盛んだった。

凡そ北の海に在る所の雜の物は、鹿郡に説けるが如し。但、柴菜は、樞縫郡尤も優れり。（樞縫郡の条）

海藻類では、ノリは樞縫郡北岸が最も優秀と記されている。今でも十六島ノリは有名。

凡そ北の海に在る所の雜の物は、樞縫郡に説けるが如し。但、鮑は出雲郡尤も優れり。捕らるる者は、謂はゆる御崎の海子是なり。（出雲郡の条）

貝類では、マユビは出雲郡の日御崎あたりが優秀で、これを採るのには「御崎の海子」と呼ばれる海子であったと記されている。



地名の起りを訪ねる

『出雲国風土記』に記載された地名に伝承

「島根」「出雲」など、私たちがふだんに用いている地名はいつ、誰が使い始めたのでしょうか。国引きの神である「八束水臣津野命」が国引きのとき、「八雲立つ出雲の国」と言ったことから「出雲」と言つたようになった」と神話に語られるように、古代出雲の地に受け継がれてきた神話や伝承が、今も地名として残っているものも少なくありません。

『出雲国風土記』にみえる地名をひもとくと、古代出雲の神々への根強い信仰とともに人びとの豊かな想像力がうかがえます。ここでは、その一部を紹介しましょう。

黒田驛

黒田驛 郡家と同じ處なり。郡家の西北二里に黒田村あり。土體の色黒し。故黒田と云ふ。（後略）

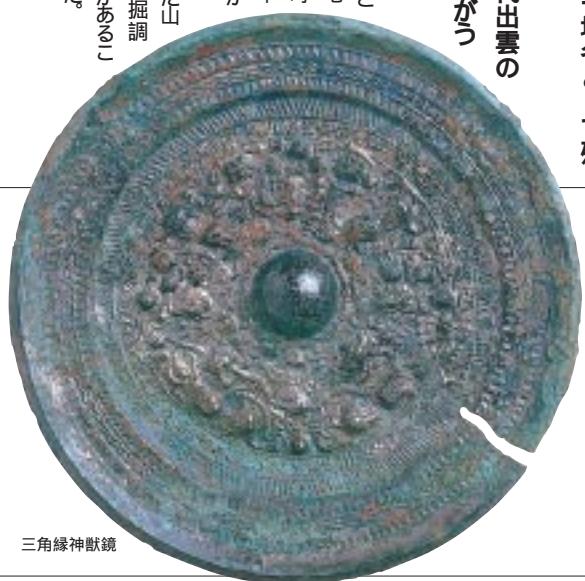
山代郷正倉跡（下黒田遺跡）の調査風景。畑の耕作土の色が黒い。



神原郷

神原郷 郡家の正北九里なり。古老の傳へに云へらく、所造天下大神の神御財積み置き給ひし處なれば、即ち神財郷と謂ふべきを、今の人猶誤りて神原郷と云ふのみ。

現在の加茂町の神原を中心とする一帯を指します。「大穴持命（大國主命）」が宝を積み置かれたところ」とありますが、一九七二年八月に加茂町



三角縁神獸鏡

で行われた赤川の拡張工事の際、神原神社本殿下の古墳から「卑弥呼の鏡」と言われる三角縁神獸鏡が見つかりました。「風土記の宝」と「卑弥呼の鏡」……偶然にしても、興味深い一致です。

法吉郷

法吉郷 郡家の正西一十四里二百三十歩なり。神魂命の御子、宇武賀比賣命、法吉鳥と化りて飛び度りて、此の處に静まり坐し。故、法吉と云ふ。

宇武賀比賣命が、法吉鳥（ウグイス）となって飛び、この地に降りたところから、法吉といつた地名になったとつて。

穴道郷

穴道郷 郡家の正西三十七里なり。所造天下大神命の追ひ給ひし猪の像の山に二つあり。一つは長さ五丈七尺、高さ一丈、周り五丈七尺。一つは長さ二丈五尺、高さ八尺、周り四丈一尺。猪を追ひし大の像、長さ一丈、高さ四尺、周り一丈九尺。其の形石となりて、猪と天と異なることなし。今に至りても猶あり。故、穴道と云ふ。

「狩りに出た大穴持命（大國主命）」が、犬に二匹のイノシシを追わせて通られた道」という意味で、もとは「し



法吉町のうぐいす台団地。『出雲国風土記』の地名起源説話にちなんで名づけられた古墳（写真右）もある。



夫婦岩（穴道町白石）中央家畜市場北方の茂みの中にあり、今もまつられている。

仁多郡

仁多と號する所以は、所造天下大神大穴持命、詔りたまひしく、此の國は大きくも非ず、小くも非ず、川上は、木の穂刺し加布（交ふ）川下は、河志婆布道ひ度れり。是は爾多志積小國なり」と詔りたまひき。故、仁多と云ふ。

大穴持命（大國主命）が「ほどよい広さで、斐伊川の上流でたしき（潤い）があって肥えている（国である）」と誉めたところからつけられた仁多は、現在も田園が広がり、秋には稲穂が黄金色に輝き、大地の恵みを産出して



現在も米どころとして有名（仁多町阿井）